

「韓国強制併合」100年の悔い改め

「古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて」(エフェソ4:22-23)

今年2010年、大日本帝国が大韓帝国を「強制併合」して100年を数えます。わたしたちは、自らの言葉で告白する事を重んじてきたバプテストとして、今この時、歩んできた歴史を振り返り、そのあやまちを悔い改め、赦しを求めると共に、未来を拓くための決意を表わします。

1910年8月の『韓国併合』は、朝鮮半島への侵略と植民地支配以外の何ものでもありません。日本は「脱亜入欧」「富国強兵」をスローガンに、朝鮮半島を植民地化しました。その時、わたしたち日本のキリスト者は、その「併合」を祝い、歓迎したのです。

韓国を「強制併合」してから36年間、日本は、土地を奪い、食料を奪い、言葉を奪い、名前を奪い、性を奪い、尊厳を奪い、信仰を奪い、生命と文化を破壊し尽くしました。それらの侵略行為の前に立ちただかることをせず、主告白を歪め、福音の証を曲げ、隣人たちの血と涙と死を生み出すことに荷担してしまったわたしたち日本のキリスト者の罪とあやまちを、今、心より悔い改めます。

敗戦後、わたしたちは、この悔い改めをもって新たな歩みを始めるべきでした。しかし「古い人を脱ぎ捨て」ることが出来ませんでした。

日本は植民地支配の歴史の精算をしないまま復興し、経済発展しました。経済成長のきっかけは朝鮮戦争「特需」でした。日本の植民地支配が、南北分断の大きな要因であったにも関わらず、「冷戦」の片棒をかつぎ、分断状況を一層深刻にしていきました。また植民地支配の結果、日本には多くの在日韓国・朝鮮人が残留しましたが、日本社会はそれらの人々の人権を奪い、差別したまま放置し続けました。

わたしたちは、「敗戦」という時の徴を見失い、歴史に目を向けず、隣人の叫び声に耳を傾けず、自己充足的な「信仰姿勢」を改めることなく歩んできました。

わたしたちがそのような歩みを続ける中、韓国のキリスト者たちの民主化への熱い祈りと闘いと、わたしたちに、神の義と平和に生きる姿を教えてくださいました。また「在日」のキリスト者たちによる「指紋押捺拒否運動」の大きなうねりを通して、わたしたちは、自らの社会にはびこり続ける差別・排外主義の現実を知らされ、共に生き、共に生かし合う社会の創造に向けて協働する喜びへと導かれたのでした。1984年に書簡「韓国にある主にある兄弟姉妹へ」を韓国へ届けて悔い改めを表し、韓国からの多くの同労者を迎えて共に伝道する機会にあずかってきました。韓国の、そして在日の主にある兄弟姉妹との出会いと交わりに心から感謝します。

それにもかかわらず1994年に日本バプテスト連盟に加盟する教会の牧師による「熊本『同化』発言差別事件」を引き起こし、いまだ発言当事者による真の謝罪に至ることができず、在日韓国・朝鮮人の方々へ差別の痛みを背負わせ続けてしまっている私たちであるという事を率直に告白せざるを得ません。

わたしたちは、これまでの自らの歩みを悔い改め、朝鮮半島に生きる主にある兄弟姉妹、「在日」教会の兄弟姉妹との交わりの中で、共に生かされていくことを心から祈り求めます。

わたしたちは、この100年の歴史に目を背けず、未来のための経験として真摯に学び続けます。神と隣人と自分自身に対して、これまでのようではなく、「古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて」(エフェソ4:22-23)生きることができるよう決意し、祈ります。

2010年7月14日
日本バプテスト連盟理事会